

## 2005年世界柔道選手権大会を見て

小俣幸嗣

### 1 はじめに

世界柔道選手権大会は、エジプトのカイロで2005年9月8日から11日までの4日間行われた。試合は無差別と男女各7階級で争われ、毎日それぞれ2階級ずつの試合が行われた。93の国・地域から、男子334名、女子210名が参加した。

残暑のきびしい日本にもどった筆者には、決まって「暑かったでしょう」という言葉がよせられた。しかし、大会期間中は、ホテルからバスで送迎され、一日中、空調のよく効いた試合場に居たため、外の様子がほとんど実感できない毎日というのが実状であった。

筆者は今まで、多くの国際試合を観客席から見てきたが、今回は審判員としての立場から大会をみることになったので、その視点からレポートしたい。

### 2 審判員の選考と研修

公式国際大会は公認審判員によって行われるが、資格には2種類ある。大陸レベルの試合を担当するコンチネンタルと、五輪や世界選手権を担当するインターナショナルである。世界選手権の審判員は、各大陸連盟から推薦され、国際柔道連盟のセミナーを経て本番に臨む。

3月の審判員セミナー(リオデジャネイロ)には日本から藤猪省太氏(天理大教授)と筆者が参加し、アテネ五輪の試合をDVDで振り

返って見解を統一する作業が行われた。内容は、技評価、罰則、場内外、待て、返し技、寝技などの項目ごとに、問題場面を取り上げ、通常速度とスローの両方で再生し細部まで分析するものである。

しかも、瞬時に判断しかねる微妙なものが連続するなか、時々指名されて見解を問われる。「イエス」、「ノー」?。うーっと躊躇しようものなら、「意見なしは帰りなさい」と笑顔できびしく突っ込まれる。実際の試合場面以上の緊張を要求される研修であった。

問題としてあげられた事例に関わった当事者も多数参加している中での検討であり、時々、本人に対しても問題点が指摘されたりする容赦ない内容だった。研修で使われたDVDは確認用に全員に配付され、共通見解とともに各自が自習できるよう配慮された。

9月の大会時の審判会議では、「取り組まない」という禁止事項に対する罰則の動作が採用されたこと、ならびに、いわゆる「ダイビング」(内股などを掛けて、頭から畳に突っ

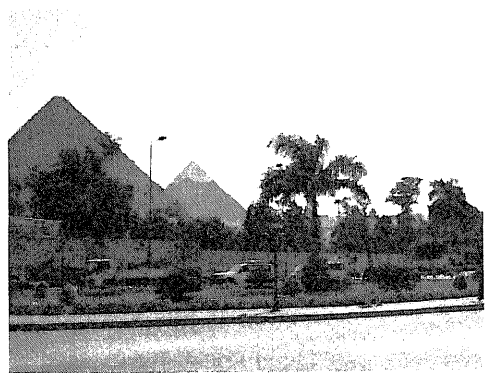


写真1 ピラミッド遠景

込むこと)によって「反則負け」になった試合者だけが、敗者復活戦など次の試合にも出場できることが確認された程度であった。

### 3 大会

3～4 試合場が設置される従来の設営とは違って、今回は5 試合場が用意された。世界選手権では初めてであり、しかも、スポンサーとなった日本の民放テレビ局の放映時間に収まるようにとの措置である、と聞いた。正面側に横並びで3 試合場、その奥の通路の左右に2 試合場が設置された。(写真2)

審判員は、ロサンゼルス五輪(1984年)で山下泰裕選手と無差別の決勝を戦った地元エジプトの国民的英雄であるラシュワン氏を含む44名、一試合場あたり審判員は9名(1 試合場のみ8名)である。

藤猪氏は写真手前真ん中に、筆者はその右側に配置された。担当する試合は、2 試合分正面に審判員番号で表示される。通常、3人の審判員が毎回入れ替わる通常の国際試合では、原則として3 回に1 回の割で順番が回ってくるので、のんびりすることはできない。9時の開始から1 時頃に行われる敗者復活戦の開始手続きまで休憩はないので、ミネラルウォーターはもちろんのこと甘いパンまで持ち込んで合間にかじりながら従事するのである。

大きな会場のわりには観客席は人もまばらで、地方大会の様であった。そのため国際大会につきものの派手な応援やブーイングが全くなく、静かに試合が消化されて行った。その一方で最高の大会特有の臨場感・高揚感が味わえなかったことには一抹の寂しさも感じた。

途中で審判委員に呼ばれて忠告を受けた審判員の中には、心穏やかでなかった者もいたに違いない。なぜなら、予選ラウンドと決勝ラウンド、決勝戦と上位に上がるにつれて、徐々に担当する審判員を絞っていくシステム

は、昨年に続いて今回も採用されたからである。

審判員の制服は規定上黒の上衣、グレーのズボンになっているが、オリンピックやアジア大会などでは特別な色のものが用意されている。今回は世界選手権でありながら、スポンサーから大会役員、審判員に特別品が供与された。(写真3)

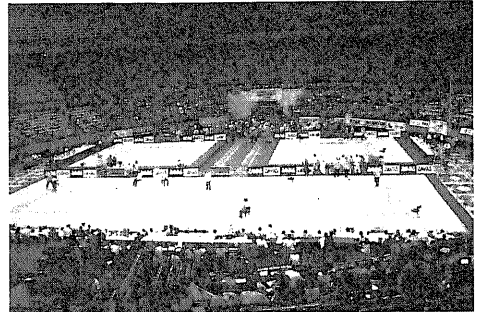


写真2 正面からみる試合場



写真3 審判を務める筆者

### 4 審判

審判に関しては、アテネ五輪の傾向が続いており、筆者にとってはほとんど違和感はなかった。それは、消極的攻撃に対する罰則の適用や状況によって寝技の攻防に時間を与えるなど、一言で言えば、「日本と変わらない」ということである。

従来の筆者のイメージでは、外国人審判員は副審のときも自分の意見を積極的に主張し、時には主審を煽るような印象すらあったが、そういう場面が見事に消えた。異見に対する許容範囲が広がったのか、単に消極的で保身に走るようになったのかは不明だが、少なくとも落ち着いた試合進行をしている印象を強くもったのは事実である。歓迎すべき傾向ではないだろうか。

選手たちの技術傾向は日本と異なるため、審判員も「待て」をかけて試合を止めることが少ない。特に、寝姿勢から立ち姿勢への移行、投げられながらの捨身技による返し技などに対しては、筆者は予め国内との違いを把握していたので、注意深く対処した。

81kg級の小野卓志選手が攻撃を防ぐため、低く伏せた瞬間、立ちあがった相手に引き上げられるようにして押し込まれ、片手で何度か支えてこらえたもののため横転した試合などは国際大会ならでの例だろう。このときは主審が「一本」を宣告、両副審が認めない動作をしたため、審判委員が「待て」がかかっていないことを確認し「一本」となったものである。

アテネ五輪では審判委員が頻繁に関与し、バルコス審判理事なども試合を終えた審判員のもとに駆け寄る姿が目についたが、今回も時々あった。筆者も忠告を受けたが、示唆に富む場合があった。審判員を統率するために有効な方法といえるかも知れない。

最後に、技判定の現状にも触れておきたい。「技あり」と「有効」の境界が限りなく不鮮明になってきている印象がある。たしかに「『有効』が甘い」、「技能未熟な審判が問題なのだ」との指摘はあるだろう。正しい基準を周知徹底することが先決であるという正論に逆らうつもりはない。しかし、「一本」「技あり」「有効」「効果」と4段階ある技の判断基準が影響しているといえないだろうか。技のできばえに明確な序列をつけるにはどうしたら

よいのか、大いに気にかかった。

## 5 選手の戦績

今大会には、筑波大学出身者が過去最多の4名出場した。高松正裕(73kg級、旭化成)、小野卓志(81kg級、了徳寺学園)、谷本歩実(63kg級、コマツ)、薪谷翠(写真：無差別、ミキハウス)の各選手である。薪谷選手は、大きな怪我から見事にカムバックし執念の金メダルを獲得した。女子無差別の金は初めての偉業である。オリンピックチャンピオンの谷本選手は決勝で不覚の一本負けを喫して銀メダルに甘んじた。小野選手は初出場ながら実力を発揮し、3位入賞を果たした。高松選手は相手とリズムが狂って、惜しくも初戦で敗退した。

今回は好成績をあげたアテネの直後だけに日本への注目が集まった。日本は男女合わせて金メダル3個、銀メダル5個、銅メダル3個であった。つまり、8階級で決勝進出をはたしたものの、5人が敗れたという戦績である。率直に言ってふるわなかったといえるだろう。しかし、コーチ陣の評ではアテネができすぎであり、選手の交代なども考慮に入れば、このくらいのものでらうという寛容な見方も聞かれた。ともかく、北京五輪を目標にさらなる強化を期待したい。



写真4 金メダルを獲得した薪谷選手  
(無差別)

## 6 おわりに

全体に大きな審判問題が生じなかったことがパルコス理事から報告があって、ようやく

われわれは解放感を得た。反省点もないわけではないが、まずはほっとしたというのが偽らざる感想である。